第２回里山学びと交流の森検討会会議録要旨

〇日時
平成１３年１２月２０日（木）　午後５時から午後７時４５分まで
〇場所
（財）名古屋都市センター１４階　第１・第２会議室
〇出席者
大竹勝委員、賀来宏和委員、加藤裕重委員、加藤倫教委員、木村光伸委員
鈴木敏明委員、津田美知子委員、出口なほ子委員、林　進委員、馬宮孝好委員
（波田善夫委員は、欠席）

・開会

１．あいさつ（愛知県国際博推進局中谷局長、木村座長）

２．議事

木村座長
・本日の議事録署名は、加藤裕重委員と加藤倫教委員にお願いする。

博覧会協会
・「国際博覧会基本計画」について説明

事務局
・「里山学びと交流の森づくりの課題整理」について説明

木村座長
・前回、県から示されたたたき台に対し、委員から「準備会の意見がどう反映されているのか分からない」「場所を書き換えれば、どこでも使えるものであり、何故海上の森なのかを明確にして欲しい」という意見を頂戴していた。
・今日の会合では、それぞれの委員が持っている意見、アイデアを出し合うため、順番に意見を報告していただきたい。

馬宮委員
・私達「国営瀬戸海上の森里山公園構想をすすめる連絡会」で考えていたことをもとに、お話する。・何故里山が重要かと言うと、これまで農林業を支え、農林業のために、定期的に木を伐採したため、自然の多様性が生じたからである。また、自然と人間が共生し、資源としても循環、持続させさながら、生活してきており、里山は、自然と資源の両面から非常に重要なものとして注目されている。

・海上の森の特徴としては、砂礫層と花岡岩層があり、砂礫層の中に貧栄養湿地があるなど、地層が非常に豊富なため、生物の種類が多く、それに伴って野鳥も豊富にいる。また集落があり、それに伴う文化があり、古窯とか焼き物もある。昔は尾張藩の御用林であったが、明治時代に県有地になり、最近では万博の絡みもあり、ほとんどが県有地となっている。また、大都市名古屋に非常に近い場所で、自然に接したり、農業の体験が出来る非常に貴重な場所である。
・里山では、何百年も農林業が継続されてきたが、現在の里山は、必ずしも昔のとおりではなく、放置された里山の復元のために、水田や畑、林等に市民が参加し、県民の合意の元に里山の復元案を考えるべきである。
・海上の森は、全体が一体となって残っており、今後も一体として残していかなければならない。以前、私達は、「全体を国営公園として保存してはどうか」というカウンタープランを提案したが、もう少し現実的な案として、市民が参加し、自然に接し、農林業が体験出来る新しいタイプの公園を提案したい。
・国営公園と環境省の自然環境保全地域、県のふれあいの森という三つの公園があり、全体を一括して保全するには、それぞれの関係者が一体となって運営することが必要であり、行政、学識者、地元、市民が加わった保全財団をつくり、そこで決めていくことを考えている。里山公園で大事なことは、市民がボランティア等で参加することであり、市民と行政との共同運営がされているところは、全国にも多くある。
・事業としては、水田や森林の管理、海上の森の整備、里山の自然保護等があるが、最も重要なのは人材の養成である。やがて海上の森を紹介出来る人を養成したり、子供も小さな時から自然に慣れさせたり、自然の生態系の循環を経験出来るような仕組みをつくろうと考えている。
・そういう公園が出来た時は、入口に施設が出来て、南地区はバードエリアとして貴重な観察の場になり、雑木林や人工林の森林管理、真ん中では里の水田、ボランティアによる里山の保全をやることを考えている。
・万博後の自治体施設と政府施設をどう使っていくのか、私達は、非常に期待している。里山の重要性は、全国的に非常に認められているが、実際に里山の研究調査をしたり、人材を養成する機関は、ほとんどない。海上の森が、注目されているのであれば、是非里山に関係した調査研究の施設、あるいは人々の交流の場の施設をつくって欲しい。
・自治体施設と政府施設の二つの施設があるので、「里山アカデミー」と「里山日本館」を考えている。一方は、海上の森の調査研究管理、今後の里山産業の調査研究、海上の森や里山についての相談の窓口、自然観察員などの人材養成等を行い、自然生態系や農林業、里山文化継承部門を持った研究施設があればいいと思う。もう一方は、参加型の博物館として、実習や実験に参加出来る体験学習、全国や世界の生態系の資料の収集、展示、発信などが出来るようにして、里山や農林業を主題とした会議にも使用していくことを考えている。
・里山大学という、市民による自主的な大学の事務局を置いて、市民が参加して費用とかプログラムを考え、全国の色々な大学から海上の森の調査研究に来てもらうことを想定している。
・里山を定期的に伐採しなければならないので、海上の森で伐採した木で運営出来る木質発電による電力の供給を考えている。そういう施設があれば、里山の現代的な利用、復元にそのまま展示し、調査研究にもなる。

・万博中は、海上の森全体の縮小版として、ここを示したい。この辺りには、メタセコイアの化石があったり、古窯とか古墳があり、隣の湿地にはハッチョウトンボがおり、シデコブシとかホトケドジョウもいる。その後は、里山の循環社会を展示したり、体験したりする場所にしてはどうかと思っている。会場外では、自然観察ガイドツアー、農林業体験、海上の文化見学等を考えている。
・万博までに、人工林と雑木林の間伐する地域を決定してもらいたい。また、新住予定地の最終帰属部署も早期に決めていただきたい。市民参加のシステムとか、人材育成のためのプログラムも考えていただきたい。
・今年推進局がやったパイロット事業は、非常に良かったので、もう少し拡張して欲しい。農林水産部の人工林、雑木林の管理等も今後拡張していただきたい。また、県の環境部で、希少種エリアの保護管理方法だとか、ガイドツアーを考えていただきたい。
・12 月８日に海上の集落に沿った地域で、海上町民立保全会議の鈴木敏明さんと一緒にゴミ拾いをした。車のバンパー等の産廃物が大量に捨てられており、最近増えてきているそうなので、早急に禁止措置対応をしなければいけないと思う。また、湿地への入り込みの制限も緊急を要する。さらに、物見山の南側等では、マウンテンバイクが急速で降下し、危なくて歩けない状態なので、こういう緊急を要することを、アクションプランとして対応していかなければならないと考えている。
・私達が疑問に思っていることをお聞きしたい。現在の国営公園の可能性はどうなのか、環境省の来年度予算の「自然再生型公共事業」として、海上の森を里山として復元する対象にする可能性はないのか、新住予定地はどのようになるのか、タイムスケジュールはどうなのか、恒久施設は、万博後の使用も考慮に入れて設計をしているのか。これらのことについてお答えいただきたい。

愛知県
・昨年４月４日の合意以降、南地区を使うことになり、愛知万博検討会議の了承も得て進めており、そこで国営公園という話が遡上に挙がり、その実現に向け努力したが、最近は可能性が非常に小さくなっている。
・海上地区の愛知県パビリオンの設計者を決めるため、現在プロポーザルの手続きをしている。２月中には、設計者が決まり、その設計者のもとで、基本設計、実施設計をする。パビリオンの一部は博覧会後も利用することを考えており、当然恒久利用を念頭においた設計を依頼していく。

瀬戸市
・この恒久施設は、瀬戸の地元に残るので、経済産業省、県、瀬戸市で、将来の使い勝手について、議論している。この「里山学びと交流の森検討会」での議論を待ちながら、関係者で議論していきたい。

木村座長

・海上地区の話になると、里山だけがテーマのように見られているが、必ずしも瀬戸の期待というのは、里山だけではない。地元の意見として、県と国との恒久施設の使い分けを申し上げておきたい。

出口委員

・私達「山口地域まちづくり協議会」では、９月の全体会の時に、委員と海上で実際に農業をされている方で、ワークショップ形式で、これからの海上をどうしていったらいいかを検討した。

・Ａ地区として、山口堰堤、銭屋鋼産跡地、海上砂防地、海上集落、Ｂ地区として、吉野町～広久手、Ｃ地区として、物見山を中心にした人工林の地区、Ｄ地区として、篠田池を中心とした雑木林の地区の四つに区分けして、検討案をまとめた。

・Ａ地区の海上地区では、銭屋鋼産跡の駐車場から海上へ入り、そこに管理施設、体験交流の施設、また瀬戸に関わる陶芸、ガラス工芸の教室等を一緒につくることを考えた。

・屋戸橋上流の「せせらぎ公園」から上流に向かって、桜などの植栽をして、一年間を通じ花の咲いた地区にしたいという意見があった。また、子供を中心に、砂防池で釣りが出来たり、池の周りの散策が出来たり、四季楽しめるようにしたいというのが、大多数の意見だった。

・パイロット事業に参加して思ったのは、銭屋鋼産跡地から集落まで徒歩で行き、そこで農作業をして汗だくになり、駐車場まで帰ってくるというのは、遠くからいらっしゃる方には大変だと思った。だから、集落に何らかの施設があれば、休憩したり、お茶を飲んだり出来ると思う。

・Ｂ地区は、博覧会が開催される地区で、そこにはシデコブシがたくさんあり、湿地もあるので、会期中に博覧会会場から海上の森へ行けるような木道や案内出来る場所がつくれたらと思う。また、シデコブシの咲いている場所は、非常に木が成長しており、早急に保全すべきだと思う。

・Ｃ地区の物見山を中心とした人工林は、山の中に入ると鬱蒼としており、お日様の光が全然入らないところばかりなので、ここも早急に保全していただきたい。

・先程、馬宮委員からも話があったが、マウンテンバイクの乗り入れにより、道路が相当に痛んでいるので、そういう場所をつくれば、林道を走りこまなくてもいいのでは、という意見もあった。

・Ｄ地区の篠田池を中心にした山林は、10 年ほど前にまちづくり協議会で考えた「ニューライフタウン山口」に、雑木林を使った野外広場とかアスレチックの出来るような広場をつくることが書かれており、それがたたき台になって出てきた意見だと思う。

津田委員

・私は、問題提起という形で書いている。

・「里山遊歩ゾーン」が一体何のためにあるのか、疑問である。位置的に考えてゲートにはなりにくく、そのアクセスも非常に難しいものがある。県道が何故必要なのかもお聞きしたい。

・集中豪雨によって崩壊した道路の改修計画は、どうなっているのか。そこに市民が参加出来るようなことも含めて、プログラムが必要であると思う。バラバラにと行うとまた、色々な問題が出てくるのではないか。
・サクラバハンノキの問題については、決して偶然の出来事ではなかったと思う。どうしてそうなったのか、どうしたらそういった問題をなくせるのかを、この場で議論しなければならないと思う。
・マウンテンバイクとか、海上集落への人の入り込みの問題も、モラル全体をどうしていくかという整理をしなければならないと思う。

愛知県
・昨年の愛知万博検討会議の結果、この場所に政府館を建設する予定だったが、自然環境の問題等を含め、さらに魅力度を高めたり、工事手法等の検討を行った結果、「里山遊歩ゾーン」として、その入口をグリーンロードと連結し、将来「里山学びと交流の森」のゲートとしていくことなど、総合的な面から現在の案になっている。

瀬戸市
・道路の改修については、後日、委員の皆様に、それぞれの工事の工期、費用についてお示ししたい。
・サクラバハンノキの問題は、津田さんが偶発的な過失事例という言い方をしているが、現状はそうではなく、非常に危険な状態であったため、やむを得ず木を切って、工事を行った。過失うんぬんではなく、まさに人命救助、人命保護のために、緊急避難的に行った工事である。
・吉田川沿いでも、危険な状態になっており、地元の要望を受け、緊急的に工事を行うよう対応に入ったが、一部の環境保護団体の方から、意見をいただいた結果、延び延びになっており、地元の方が難儀をしている。
・環境保護は、大切な問題だが、人命と秤にかけた場合、どちらが大切かという観点から、市では順次工事を進めていきたい。是非現場を知っていただき、地元の方の声を聞いて、この場では議論していただきたい。

愛知県
・工事の施工にあたり、希少な植物等の保護が、非常に大切であるということで、関係者が一層の連携を図るため、去る４月 20 日に打ち合わせ会を開催した。そこでは、対応策の色々な事例を勉強したり、希少種の位置情報等が分かるように、連携、連絡体制をつくり、また、現場作業員の教育のための環境配慮事項も、マニュアル的なものがあったので、それを共通財産として持ち合おうということになった。

出口委員
・道路改修の件で、今年の３月に改修工事をする予定だったが、その時期は、オオタカが営巣中であるということで、未だに放置されている。鎖止めから 300m程上流に農業用水の取水口があり、その途中が崩れている。農作業の期間中には、ちょっとした大雨でも、そこまで行っ

て作業をしているが、大雨が降り出すのは、昼とか夜の問題ではなく、大変困っているので、早急にあの道路だけでも、修繕していただきたい。

林委員
・一言だけオオタカ検討会の委員として、意見を述べさせていただきたい。何も一切の工事を差し止めているのではなく、オオタカの繁殖活動に支障を与えない限り、専門性、科学性、客観性に基づいて議論し、検討会に図ってきちんと認めている。だからオオタカのせいだと言われるのは、ちょっと心外である。私は、工事計画をきちんと成熟した形で示せない、地元のシステムとしての未熟性を申し上げている。

事務局
・波田委員の「愛知万博における自然観察のシステム構築に関する私見」について説明

加藤（倫）委員
・具体的なことではなく、コンセプトについて書いた。
・基本構想の中では、海上の森の保全、特に里山の保全についての意義の考え方が少々弱いので、もう少し強調してみたい。
・海上の森を保全し、活用する意義は、希少な野生動植物の保護だけでなく、海上の森という「里山」が 21 世紀のライフスタイルを象徴することを国のレベルにおいて認識したことにある。
・自然環境と調和した生産・生活・文化の象徴が日本の里山である。その里山環境も日本経済の高度成長とともに荒廃してきており、この点でも戦後の日本は、重大な岐路を迎えている。自然環境を破壊しない、自然と調和する「里山」に象徴される循環型社会への移行は時代の必然となっている。
・「里山学びと交流の森づくり」の基本コンセプトは、こうした時代認識を基底において、考えていかなければならない。21 世紀の人類の基本的なライフスタイルの世界への提唱という、未来思考の保全・活用という基本コンセプトをさらに明確に提示して、海上の森の保全と活用の事業や将来の施設運用を進めるべきである。

鈴木委員
・現在の海上の集落がどうなっているかというと、構造的に大口の土地所有者である県と小口の我々が共同しないと、稲作も畑作も全て維持出来ないということになっている。
・パイロット事業では、土石流が発生した場所に土嚢を積んでいただき、ボランティアの人やまちづくりの人に感謝している。お互いに情報交換しながらやってきたので、結果としては非常に効果があった。
・森林保全課の事業も、多くのボランティア参加者のおかげで、光が差してきたと思うが、まだ面としては非常に弱いので、是非予算をつけていただいて、急速に復元していただきたい。
・次の資料は、弘法堂の再建に関わった資料で、私が県と瀬戸市の民俗資料館の方達と海上の生活誌を紐解いているところである。弘法堂の中には三体の弘法大師があり、古老の話によれ

ば、海上地区には、それぞれの家に弘法様がいたそうである。
・最近、海上について書かれた色々な本が出版されているが、残念ながら私達が書いた本がないのが、最大の欠陥だと思っている。昔の人の労苦に敬意を表しつつ、現在を見ていかなければならないと思っている。それらの本の中には、海上の人間は苦労に耐え切れず逃げ出したというような、少し間違った認識がある。海上の生活の苦労に耐え切れず出ていったのではなく、新しい仕事、職種、自分のやりたい希望を求めて海上を出ていったという側面もある。
・私の曽祖父は「鈴木鉄五郎」という名前と陶器の裏側に書く「喜十」という名前と二つ持っていた。喜十の長男は、そのまま海上に残り、次男と三男は、海上から上品野に移動した。それは、海上の生活の惨めさ、苦しさに耐え切れず逃げたのではなく、九州の有田に赤絵の研究のために出て、修業して学んで、瀬戸に帰ってきて、鈴木鉄五郎の実家がある上品野に居を移して、陶器窯を経営することになった。
・私の頭の中の海上というのは、「海上、四澤、塚原、篠田」、これが全て海上であり、「海上の森」と色々な市民団体の方がロマンチックなイメージで呼んでいる場所というのは、海上集落の周辺のところである。
・海上では、かなり色々な人が交流していたので、「里山」というイメージを押し付けることは、私自身も含めていけないと思う。絶えず多面的な価値を持ちながら、大切にされる場所であると意識している。
・「伝習館」の中身については、まだ使いうる屋敷があるので、そこで「サテライト海上大学」のようなものを考えている。この地域には、大学のネットワーク、その人的資源があるので、そこを意識していきたい。
・現在、私自身「本草学」に関心があり、山野草を含めながら、本草学を少しつついてみたいと思っており、私の屋敷を山野草や本草学の面白い場にしてみたいと思っている。万博の時には、茶堂として、元屋敷を提供し、協賛会場としての海上集落の中に、外国人の方がたくさん入ってきた時は、日本人の究極の温かいもてなしをしたいと思っている。
・最終的には、ひょんなことから我々鈴木一統の人生は、海上で始まり、海上に振り回され、そして海上で尽きていく訳で、今ここで出ている議論が「伝習」という形で、うまく結実していけば、それは豊かな生命力を保ってくれると思う。
・「伝習館」は、県や市から委託された業務ではなく、私を含めた海上の人間がやっていくべきだと思う。また、ここにいる方達の意見や技術指導もいただきながら、やってみたいと思っている。また、皆さんに場を提供することも、大変光栄であると思っている。

林委員
・海上の森の保護の場所をどうするか、人工林をどう管理するのかとか、雑木林とか、自然観察とかは、日本全国でやっており、それをこの海上の森で集大成するという意見に対して、私は非常に疑問を持っている。
・海上の森では、色々な長い経緯があって、今ここで議論をしており、何故ここでやるのかということは、加藤（倫）さんや鈴木さんがおっしゃたことがあるからだと思う。海上の森に何かをつくるのではなく、私達がどう関わっていくのか、どう伝えていくのかを考えなければな

らない。
・鈴木さんがおっしゃったように、先祖伝来の土地に住みついてきたその歴史を踏まえて、関わりたい人は関わり、ただし、関わる人はそれなりに責任を持って関わって欲しい。単なるお客さんではなく、自分達の地元で活動して成果を挙げてきている、そういうものを持ち寄って欲しい。
・施設がなくても、空間があればいい、人が動けばいいだけである。「ネットワーク型」と言ってもいい、そんな学びのシステムが求められている。ここで何が交歓出来るか、かなり長い歴史をどう総括していくのか、それが今問われている。
・何が足らないのかと言うと「目的論」と「プロセス論」が、全く区別されていない。万博を契機にするからこそ、理念的なものをきっちり押さえておきたい。技術的なことは、いくらでも解決出来る。
・「里山は農で支えた」「里山＝一次産業」というのは、これは間違いで、里山というのは、言ってみれば「一×二×三」「一＋二＋三」の独自産業で、多様なところが里山である。
・本阿弥光悦がつくろうとした光悦村は、それこそまさに里山都市である。里山都市は、決して農業ではない。農業だと言いきるところに、農業は遅れたものだ、だから同時に里山も変えていってもいい、というおこがましい考えが出てきた。里山こそ日本であり、大和というのは、まさに里山都市であることを押さえ込む必要がある。
・里山財産の把握の仕方、希少植物うんうんをもっと越えるものがないのかと思う。未来に向けて発信するのであれば、「戦略的価値評価方式」を開発し、それを海上の森に提供した時に、どういうことが言えるのか、自分達がどういう価値付けを出来るのかが、問われている。それをどう具体的な姿にしていくのか、今後の海上をどう設計するのか、どうデザインするのかということに繋がっていく。これが第一点。
・第二点、里山に関わる地域社会のあり方は、里山＝農業とか林業だけではなく、九州まで行ってきた窯業もある。海上の森に住んで、資源のあり方や使い方を最大限に求めたからこそ、九州まで出掛けて行き、自分が生きている場所、生きようとする場所を生かすために、そういう情報ネットワークまでつくり出してきたのだと思う。明らかに海上の森には、新しい価値を見出す人間集団がいたということであり、それをもう一度つくり出さないとダメである。
・これまでこの森に関わる色々な議論があったが、それは、結局利害が、出てきたことかもしれない。かつての共同体は、「利害共同体」であった。それを今度は「価値共同体」という方向に向けていく、価値を共有することで、利害調整とか、利害を超えた合意が出来ていく訳で、そういう地域社会をつくってみませんかというのは、長い歴史を踏まえた海上地区だからこそ、議論出来るのだと思う。それが第二点。
・日本の潮流として、新たな共同体を模索しようという動きがある。その一つの答えを、「里山」と言われるここで生み出してみたい。だからこそ、世界に発信出来るのだと思う。小さな一歩かもしれないが、非常に大きな一歩になるような可能性を持っている。
・第三に、里山に関わる人間性のあり方。あの森は豊かだが、それは、適度な貧困さを持っているがゆえの豊かさである。これは、生物学の常識として、世界各地で立証されている。豊かさというのは、与えられ続けることが豊かさではなくて、自然界では、与えられることが制限

されるからこそ、豊かな生物社会が出来上がる。
・適度な貧困さが、本当の豊かさをつくり出していくことを実感出来る、そういう感性を持った人間性を、あの場で回復していきたい。その感性に支えられた「里山」は、風景として現れる。生き物の世界の中で生きていって、それに支えられてこそ、はじめて豊かな人間性が出来ていく。里山の生物的倫理に支えられた人間精神を確立し、里山に関わろうとする人間性を、もう一度取り戻してみる、そこまでやるのだと思う。
・最後は、里山に関わる学びのあり方。これは、現場で体験し、体感することを学びの原点にするということである。学びは、自己学習のレベルでは終わらない、集団学習である。集団学習では、既に自分達が会うことが出来ない人達が積み重ねてきたもの、つまり過去の人間とともに学ぶからこそ、未来の人間に対して、自分達も学んだことを伝えていける。
・集団学習という発想がなければ、地域とか、組織とか、システムとか、それに繋がる人材を育てていくことは出来ない。学ぶという行為は、人を交流させ、人の生涯を貫く営みにもなり、時間枠をも越えていく。
・この地域の森、里山に関わる「語り部」をどう確保していけるか。それが人材育成の軸である。人材育成の実態なしに、新しい社会システムをつくるというのは、それは形だけの議論に過ぎない。
・勤労というのは、地域のために働くのであり、自分の稼ぎのために働くのではない。学びと勤労を伝承しつつ、一体化するその仕組みづくりを、ここで考えてみてはどうか。
・もっと自由なフリーな形で、色々な知恵を持ち寄り、自らの技として、それを海上地区で植えつけ、それをまた他の地に持ち寄って、あちこちに種まきしていく、そんな流れをつくる拠点として、この地区を生かすことが出来れば、これは色々な論議を重ねてきたこの海上の森でないと出来ないオンリーワンのものである。

加藤（裕）委員
・私は、教育とか学びという部分で、お話したい。
・ここは、社会活動のフィールドになっていったらいいと思う。今、学校の教育が変わってきており、来年からは、完全週休二日制になったり、また総合的学習という時間が出来たり、また瀬戸市独自の教育のあり方を検討する会議が出来たりしており、そういうものを花開かせることが出来る場所になり得ないかと思う。
・この海上でも何か焼き物のことをしてみたい。焼き物というのは、昔から職人言葉で「一土、二焼き、三細工」と言われており、どこでも出来るものではなく、その土地で採れる原料が必要で、瀬戸にはその長い歴史があり、現にこの土地には、古窯もある。
・そういう事実を踏まえ、原料から学べる焼き物に関したフィールドになったらと思う。それは、子供だけではなく、世界の人にも、大人にも対応出来るし、プロフェッショナルでも学ぶ部分が多いと思う。
・林先生の話にもあったが、あとは人間のシステムだと思う。自主的に教えたり、学べる組織が出来たり、インストラクターが生まれたり、そんな形の場所になればいいと思う。また、そんな議論が出来たらと思う。

大竹委員

・この前からの議論を聞いていると、色々な意見があるが、全体をどういう理念でこの森をまとめていくかということがないので、うまくいかないと思う。

・最近は、博物館そのものをつくるのではなく、その地域を全部含んだ形で、そこでの生活も含めたものを資料とすることが考えられている。保存の問題もあるし、また活用する面も必要だが、全ての面を備えていることが、重要なポイントになると思う。

・このような計画が出来ると、すぐに絵が出来上がってしまうが、そうではなく、まずその前に理念をつくりあげるべきだと思う。

・今まで山の中にあった道をそのままの状態で生かしておけば、わざわざ新たに遊歩道をつくる必要はない。里山は、公園とは違い、当然石ころがあって、それにつまずくこともある、そういうのが、里山だと思う。そういう原点を失い、施設面だけが先に検討されていってはならない。恒久施設として出来る県や国の施設については、やむを得ないとしても、その後は、何もない状態で始め、それを運営していく行程で、検討を加えながらやっていけばいいと思う。人が描いた設計図を、また後からなぞっていく形になって、実際の理念と全く違うものが出来上がってしまうというのが、現状であり、実際にその施設は生きてこないのではないかという気がする。

・まず、そこに集まるシステムをつくり、そこで検討を加えていくことから出発しなければならないと思う。ここに参加しているメンバーが、ずっと携わっていける訳ではなく、色々な人が受け継いでいかなければならないので、あまり完成しないものをつくる必要があるのではないか。

・現在の森の状態では、最低限の管理はしていかなければならないし、道路が壊れたところは最低限の改修をしていかなければならないが、そういうものを踏まえて考えていく必要があると感じている。

賀来委員

・まわりで見ていると、海上の地権者の方と自然あるいは文化を守ろうと活動されている団体の方とは、同一の歩調であると思っていたのが、実は相当な行き違いがあることが、この前の検討会の一番の驚きだった。地元の方の基本的な生き様というか、人権がまず第一であると思う。

・私は、愛知万博との関わりが、非常に大切であると思っている。愛知万博の時に何が出来るのかを、是非検討会からも発信していただきたい。

・博覧会のお手伝いをしている立場から言うと、愛知万博の現状は、非常に厳しいと思っている。残された三年の期間で、これだけの事業がやれるか、非常に危機的なものがある思っている。

・この「里山学びと交流の森」をやっていくためには、まず愛知万博をきっちり軌道に乗せて、成功させることが大切だと思う。その意味で、愛知万博の際にどう関わるかは、大変重要なことだと思う。

・個人的な意見だが、「里山」「海上の森」だけではなく、「失われる農の知恵」とか「失わ

れる森の知恵」をきっちり伝承していくような博物館を、是非この際に残していただきたい。植物だけではなく、我々の知恵にあった、人が生きていくための農とか森の知恵が、どんどん失われており、是非その蓄積をしておきたい。
・博覧会というと、先端技術や映像とか、ＩＴになるが、もっとしっとりした展示物がやられるべきで、この機会にそういうものを残しておかないとダメだと思う。
・海上に関わられた方、環境団体の方にお願いしたいのは、是非この博覧会に参加していただきたい。この「基本計画」に「企業、団体等の参加、市民参加」とあるので、そこに堂々と出展していただきたい。企業グループにアクセスをして、青少年公園地区の中で、海上の森のことを含めた里山のことをパビリオンとして出展する力が市民の側にないと、本当の意味での世論の評価は得られないと思う。
・前回のハノーバーの万博では、ドイツ全土で色々な環境の展示があったが、博覧会の来場者が行ったかというと、行きはしなかった。だから海上地区から海上の森の中に行くプログラムをきっちり博覧会計画に位置付けておかないと、「何だか知らないけど、自然を好きな人達が、向こうの林の中で何かやっているね」というだけで終わってしまう。

木村座長
・一通り委員の方の発言が出たので、私も一言だけ、委員として言わせていただく。
・この数年間、海上の森に関する騒動を見てきて、欲求不満なのは、いつも海上の森の中だけで議論しているので、議論がどんどん細かく細かく入り込んでいる気がする。
・海上の森は、孤立した森ではなく、尾張東部、北部の丘陵地帯、あるいは東濃地域と完全に繋がっている、あるいは繋がっていた森である。私は、東濃地域の自然と二十年ほど関わっているが、そういう目で見ると、海上の森は、本当にみすぼらしいと思う。それは、みすぼらしくなってしまったのだと思う。「かつては、そうでなかった」と鈴木さんもおっしゃている。本当の海上の森がどうだったのかというイメージをつくらないまま、現状だけで議論してきた部分があったと思う。
・私どもは、五年に一度、「多治見の自然展」というものを開催している。これは、多治見で、それぞれ自然に関心を持っている人達が、実行委員会をつくり、自治体からお金だけ貰って、自治体は口を一切出さないで、自分達で展示会を三日程やっているものである。
・こういう活動を自力でやってきているので、具体的な展示は、あっという間に出来るし、次々と活動しているので、地域に情報がどんどん蓄積されている。海上のすぐ近くに、こういうところがあることを、知ってもらいたい。
・もう一点、全部が面として繋がっている、その中の海上の森が、シンボルとしてどう取り扱われているのか。海上の森の中も大変大事だが、その海上の森の大事さを強調するためには、周りの自然がどうであるかということにも、常に注目を払っていただきたい。残念ながら、海上の問題を議論する環境団体は、そこのところをほとんど問題にしなかった。
・その結果、瀬戸市内には、ものすごくたくさんの産廃処分場が出来て、今もどんどん出来つつある。そういうものを放置しておきながら、「海上の森のは、何とかのシンボルである。自然が豊かだ」というのは、ある種偽善に過ぎないと思う。

・我々もそういう運動をやらなければならないが、自治体もそういうことを背景として、きちんとまとめあげる重大な責任があると思う。環境万博をやるのであれば、こういうところもバックグランドとして欲しい。
・私も上品野地区の産廃問題に関わっているが、一方で何百人も住んでいるすぐ近くに産廃が出来上がるというむなしい思いをしながら、一方ではホトケドジョウがいるから、道路が出来なかったりする、そういう矛盾を抱えながら、この検討会にいるのは、非常に苦痛である。
・そこを自治体として、あるいはもっと大きな枠組みとして、どうしていくのか、これは環境三団体も含めて、こういうバックグランドを持って、海上の森の問題を見つめていただきたい。
・一通りご意見を伺うだけで、もう既に制限時間が過ぎてしまったので、次回は、もう少し整理した形で進めていきたい。

３．報告事項

事務局
・「海上町の生活誌」の編纂について報告

木村座長
・時間の制約で、次回には、意見交換を行いたい。
・次回の日程について、事務局の案はいつ頃でしょうか。

事務局
・二月中旬頃の開催を考えている。

木村座長
・座長として、こういう会合は、二月の中旬でも構わないと思うが、もう少し忌憚のない意見交換の場を、出来れば鈴木さんのお宅に寄せていただいて、行うことを提案したい。番外編として、出来れば一月中に持たせていただきたい。そこでさらに忌憚のない意見交換をして、私達のイメージを膨らましていく作業が出来ればいいと思う。
・第３回の会合は、二月の出来るだけ早い段階でお願いしたい。

事務局
・本日は、委員の皆様には、貴重なご意見、有意義なご意見をいただき誠にありがとうございました。

・閉会